



魔法少女

魔界

小説 酒井 仁

挿絵 MOYURU / n

第一章	漆黒の魔法少女	006
第二章	断ち切れぬ、過去	056
第三章	守護者の誇り	119
第四章	邪神降誕	185
エピローグ		252

登場人物紹介

Characters



くろせ 黒瀬 ファイナ

普段は人を寄せつけない寡黙な娘だが、魔物が現れると黒衣の魔法少女に変身して闘う。戦闘時は殺意をむき出しにして、圧倒的な攻撃力を発揮する。

のぼら はつの 野薔薇・スタン・初乃

ファイナのクラスメイトで、同じく魔法少女。ファイナとは対照的に、敵の殲滅よりも人々を護ることを優先する。防御や修復の魔法が得意。

ドランベル

ファイナのパートナーを務める黒猫。戦闘時には巨大な黒豹へと姿を変える。

パルル

初乃の素質を見抜き、魔法の力を与えた白くて丸い毛玉生物。

隠そうにも両腕は左右に開かれ、むき出しになった腋に肉蛇がごりごりと先端部を押しつけてくる。無論、二つの大きな乳房にも触手は幾重にも絡まり、くにゆくにゆと淫らな刺激を与え続けている。

細い触手に摘まれたニップルがキュンキュン疼いて、自分自身の血の流れまで感じ取れるようだ。その様子を見物しているかのように、不気味な肉柱はゆっくりと左右に巨大な頭を振る。

(見られている……?)

ダーキッシュに目はないが、ファイナにはわからない視覚器官があるのかもしれない。それが証拠に全身に、特に足の付け根の部分に強烈な視線を感じる。

薄い布地を通して少女の秘密の部分に無数の視線が突き刺さっているのがわかる。粘液中で濡れた黒い布地にぶつくりと盛り上がった少女の土手、そこにぼんやりとだが肉の溝のようなものが刻まれている。

なまじ直接的ではないだけに、いまだ発展途上にある汚れなき乙女の股間は、いっそう艶めかしくレオタードに刻印されていた。

「見つつ……!!」

間違いない、怪物は自分の晒している痴態を、少女の大切な部分が無防備な様をじっくり眺め、楽しんでるのだ——!!

「こ——殺すッ! 貴様、ら……一匹残らず、塵にしてや……あ、はあう……ッ!!」

声が枯れても叫び続ける黒の魔法少女の脳裏には、初乃やドラランベルが助けに来てくれるかも、という考えはなかった。ダーキッシュを滅ぼすのは、ファイナに課せられた運命なのだから。

血が滲むほど唇を噛みしめ、もがき続ける黒の魔法少女の心は怒りと恥辱の炎に炙られる。

「ちっ、近づくなッ！」

ゆらりと肉柱が股間に近づいてくるのを見て、ファイナはこの奇っ怪な形がなんなのかに思い至る。そして、戦慄した。

(これ……男の……あ、アレ……?)

本物を見た記憶はない、知識で知っているだけだ。

だが、人間の股間にぶら下げるにはサイズが大きすぎる。触手でできた巨大な男根は、少し身を反らせたかと思うや、開脚したファイナの股間にツヤツヤした先端を勢いよくぶつけてきた。

「けほっ……!!」

骨盤から脳天まで響く衝撃に、思わず呼吸が止まる。魔根はそのまま幹の部分を屈曲させ、ぐりぐりと足の付け根に先を押しつけてくる。多少の弾力はあるものの、みっしりと肉の詰まった感触に乙女の花びらが押し潰される。

ごりっ、ごりごり……ッ!

「ッッッッ！　　そ、そんな攻撃が通用すると思っっているのか、この下等生物が……ッ！」

ぐりぐり……ぐりぐり……っ。

執拗にレオタードの脇から先端をねじ込もうとするような動きに、ファイナはポニーテールを振り乱して悶える。ほとんど水平なまでに開脚を強制され、股関節が悲鳴を上げる。（まさかっ……この巨大なものを、い、入れるつもりなのか、私の中に？）

魔肉柱の動きは、そうとしか思えない。

一抱えはあるうかという巨体をよじり、押し当て、捻り込もうとする。だが、無茶な相談だ。人の頭ほどもある先端を挿入しただけでも、ファイナの性器は引き裂かれ、骨盤は砕け折れる。

だが、挿入は無理だとさすがに悟ったのか、魔根は不意に動きを止めた。しかし先端部はひりひりと疼痛を訴える股間に押し当てられたままだ。

（くそっ、化け物なんかには弄ばれるなんてっ！）

用足しに使うその部分には、ファイナ自身もほとんど触れたことがない。

そんな部分を容赦なく擦られ、煽られてジンジン痛むのだが、痛みとは別に、奇妙な疼きをファイナは覚えていた。股ぐらが妙に熱い。まるで、魔物の愛撫に反応して感じ始めているかのよう……。

「そんなこと……ない、ない——っっ！」

顔を真っ赤にして絶叫に近い声で否定する、その目の前で魔巨根の動きが変わる。闇雲に押し込むのではなく、局部に亀頭を押し当てた状態で、細かな振動を始めたのだ。

ヴヴヴヴヴヴヴ……ッッッ！

「んああああッ!? くっ、クウ……ッッ！」

もともと魔根は数百本の触手が寄りあわさったもの。それが一斉に蠢き擦れることで高速振動が生まれ、秘密の部分を刺激し始めたのだ。

振動は股間だけでなく、骨盤、そして身体全体にまで波及する。幾本もの触手に搦め捕られた少女の肢体がレオタードの中で小刻みに震え、触手の感触にさらに刺激を上乗せしてくる。目に見えない微細な振動に、敏感な乳首が反応してヒリヒリ灼ける。

ぐちゅっ、ぐじゅっ……！

低い振動音に明らかに湿った音が混じる。見なくてもわかる、乙女の淫らかな唇から体液が滲み出ているのだ。わずかに露出した肉の花びらを圧迫されるのはむず痒いが、苦痛ではない。それどころか、心地よささえ感じてしまうのが、自分でも許せない。

(うそだ、こんなの……うそだッ！)

ファイナは困惑していた。自慰経験すらない魔法少女にとって、自分の性器が魔物からの刺激で濡れ始めるなど、信じたくもない。

だが股ぐらはどんどん熱を帯び、湿った音が大きくなる。魔巨根の分泌液と女の汁が混じりあう。潤滑油を得た魔物の振動はいつそう激しさを増し、花びら、特につんとしこっ

た小さな肉豆が痛みと見まごう鋭い快感を訴える。

じゅぶ、じゅぼ、こりっ、こりこりッッ!

「くひい! いっ……違……気持ちよく、なんか!」

懸命に否定しようとしたそのとき、いきなりポニーテールをすごい力で真下に引っ張られた。

「ぐっ! うあ、あ……ッ!!」

懸命に抵抗するものの、徐々に少女の顔が真上を向く。口を閉じることができず、半開きになった唇の上で、別の触手が鎌首を持ち上げる。

「うぐうウウウッ! やめ……んむちゅッ……!!」

M字開脚で宙に拘束された黒の魔法少女のふくよかな唇に、不気味な触手がねじ込まれていく。

じゅぼっ、じゅゆる、ぐちゅっ!

頬粘膜を内側からゴンゴン突き上げ、いやらしい粘液が菌莖になすりつけられる。上顎をぎりぎり擦られ、胃の腑がせり上がってきそうな嘔吐感に、喉が痙攣し、頭がくらくらした。

「むちゅ、うウッ……! ふあ、んじゅゆる……っ」

口中で暴れる触手を舌で押さえつけ、どうにか吐き出そうとするが、逆に触手と舌を絡ませあう結果になってしまう。魔物とのおぞましいディープキス。

それに、どぶ川の腐ったような生臭い臭気と生暖かさ。粘液が唾液と混じって、臭いが鼻孔にこびりつく。かろうじて鼻で呼吸はできるが、口の中に溜まった粘液が何度も鼻孔を塞ぎそうになり、泣く泣く飲み干すしかない。

ごきゅっ……ごきゅっ……。

化け物の体液を懸命に嘔下すると、また空えずきが襲ってくる。苦しさと悔しさに涙が滲む。

(熱い……おなか、奥が……熱くなって……！)

悪寒で背筋が凍る一方で、幼くも肉感的なファイナの肢体は異様な熱を帯び始める。

それは全身をくまなく這い回る触手との摩擦熱でもあり、生ぬるい分泌液の熱でもあるが、それ以前に体液の持つ不可思議な作用としか考えられない。

ばくばくと鼓動が高鳴り、レオタードの内側にじつとりと汗が滲む。

頭皮の毛穴が開き、耳のうしろを幾筋も汗が伝い落ちる。口内をぐちゅぐちゅと掻き回す不快な感覚に苛まれつつ、視界が汗と熱気で潤んでゆく。

(苦し……息が……それに熱い……灼ける……ッ)

指を三本まとめたくらいの太さの肉蛇が、うねりながら口内を、喉奥を圧迫する。蠢く触手を吐き出そうと、何度も全身を突っ張らせ、髪を振り乱すが、怪物はついに先端を食道にねじ込ませた。

ず……ぶぶぶぶッッッ！

「おおおおおお！　ぐぼオ……ツツツ！」

じわじわと、だが確実に肉蛇が挿入を深める。

喉が押し広げられる感覚は、もはや嘔吐感などという言葉では言い表せない。せり上げる胃液も口まで達せず、ぐるぐると不快な音を立てて胃が鋭く痛む。

「！……！！………ツツツツツ！！！」

ぐりゅんつつつ……！！

呼吸困難で気が遠くなりかけたとき、腹が「内側から」押されるのを感じた。忌まわしい肉が食道を通過し、とうとう胃袋に到達したのだ。鳩尾みぞおちに鉛を詰め込まれたような鈍痛が走る。

（私……ダーキッシユに……おかされてる……）

内側を侵されるのは、少女にとつて「犯される」も同義。股間にあてがわれ、振動を与えている巨大な肉柱にこそ陵辱されていないが、確かにファイナは呪わしい肉の怪物に「汚された」と感じた。

（クソ……クソツ、クソオオオツツ……！！）

怒りで目の前が真っ赤になる。ポニーテールを振り乱してもがきまくと、パッと前髪が散って汗の飛沫が飛ぶ。

そんな弱々しい抵抗を嘲笑うかのように、ダーキッシユは少女の胃袋を掻き回し始めた。平らな腹部がぼごんぼごんと不気味に膨れ上がり、嘔吐の何十倍もの苦痛に襲われる。

胸郭に向けて触手が突き上げると、肺が圧迫されて呼吸が止まる。

「んふううっ！ むっ、ずちゅうう……ッ」

ぐるぐる……ごりっ、ムリムリィッ。

胃壁をさらさら撫で回される、異様な感触に怖気を震う。完全に喉を貫いた肉蛇を吐き出すなど不可能、悠然と少女の体内を陵辱する怪物に身を任せるしかない無力感に、怒りがさらに込み上げる。

その間も股間に押し当てられた肉柱は、細かな振動による刺激を敏感な肉芽に与え続けている。振動は繊細とさえいえる絶妙さで、ファイナの意志とは無関係に、快感の波動が骨盤に満ち溢れてくる。

まるで——まるで心が二つに引き裂かれてしまったようだ。

(ここまでなのか……いやっ、まだ……まだだッ)

心が屈したわけではない。

だが為す術もなく上と下からの波状攻撃に晒される少女の肉体は、知らず淫らな反応を見せ始める。

レオタードの内側でじつとりと汗が滲み、堅くしこったニップルがさらにくつきりと浮き上がる。肉蛇が腹の中で暴れるたび、豊かな乳房がゆっさゆっさ上下左右に揺れ動く。布地と擦れた乳首が切ない快感を訴え、ファイナは眉をひそめた。

(ダメだッ、心を閉させ……！ 何も感じるな、感じたら……負ける……ッ)

じゅわ……にちゅっ……。

願い虚しく、腹の奥から熱いものがさらに噴きこぼれる。体温よりも熱い汁が花卉を濡らし、レオタードに染みを作るのに、そう時間はかからなかった。

(感じるな、感じるな、感じ……る、な……っ！)

だが、股ぐらはほとんど熱を帯びる。

明らかにファイナ自身が分泌した女の液体が止めどなく溢れ、乙女の秘唇をぐっしりと熱く濡らしている。大量分泌された汁を潤滑油として、魔物の振動はいつそう激しさを増してゆく。

「んうっ、じゅるっ……はぶ……びちゅ……っ」

唇の端から涎を噴きこぼし、M字に開いた内股が痙攣する。薄い布地で保護された秘密の部分、醜い魔肉に押し潰されて、ねっとり熱い汁を漏らす。

じゅぷっ、にぢゅっ、じゅっ、ぐじゅぷぷっ！

股間全体がじんわり痺れ、ぴよこんと突き出た小さな突起が灼けつくように熱い。しこった肉芽は火打ち石のように快感の火花を散らし、容赦なく頭の奥に突き刺さって理性をぐちゃぐちゃにする。

ぐりんっ、ぐりっ、ごりりっ！

肉魔柱がうねり、リズムを取るように先端を擦りつけ始めた。そのリズムに合わせて胃袋の中で触手の群れがおぞましいダンスを踊りだす。

(感じ……ない……ないイイイイッッ!!)

自らを蝕む快楽という名の麻薬から逃れようと、少女はポニーテールを振り回し、ガチャガチャと魔杖を鳴らす。しかし乙女のトンネルの奥からは後から後から淫らな汁が噴きこぼれ、レオタードはぐつしよりと濡れそぼつ。

「ふあっ、ちゆるっ……ぺちや、じゆるるっ……」

ただ足の付け根が燃えるように熱く、ある一点だけが錐を突き立てたように冷たい。そこを中心に愉悦の波動が骨盤の中を荒れ狂い、溢れた快楽の蛇が背筋を駆け上がり、手足の隅々にまで広がっていくのだ。

「ヴィイイイイイ……!」

歓喜の声を漏らす淫巨根の先端からも、透明な液が滲んでさらに滑りをよくする。股間の肉突起がバチバチと火花を起こしそうにわななく。

「ちゅむっ、んはあ……ッ!」

酸っぱい臭気を上げる胃液が鼻孔から噴きこぼれた。根本から大きくうねり、再び少女の肉穴にラッシュをかける魔根の攻勢に、歪いびつな快楽が込み上げてくるのが抑えられない。

(いやだ……こんな終わり方は、いや、だ……)

「んふううん……んじゆるううっッ!」

股間に飛び散る飛沫はどちらの体液なのか。たった一枚の布地で隔てられた魔亀頭と少女の花弁は、ともに喜びの汁を垂れ流す。内股の筋肉がヒステリックに痙攣し、快感の水

位はどんどん上昇してゆく。

「ヴァオオオオオオオンッ!!」

上と、下とで魔獣が吼える。

引き締まったヒップがガクガクと揺すぶられ、粘液まみれの乳房がふるふると飛沫を撒き散らす。魔法少女の外も、内も、至る所に愉悅が飛び火して全身に延焼が広がる。

(止まれ……私の身体……鎮まれエエエエ!)

少女の願ひ虚しく、巨大な魔男根の最先端部がファイナの中心——敏感な淫豆を正確に刺し貫く。ぶ厚い肉に押し潰された淫豆から、それまでとは比べものにならない快美の稲妻が走る。いっばいに見開かれた視界の中で閃光が瞬いた。また

「むちゅッ! ちゅば、はぁ……ッ!」

巨男根が、大きな痙攣を繰り返す。胃袋が猛烈に抉られ、口中に胃液が逆流する。苦悶と快感はマーブル模様のように渾然となつてゆく。

(止まら……ないッ、抑え、られな……!!)

魔根に共鳴するかのように、手足がひくひくと震える。心では拒否しているはずなのに、触手と協力して肉体が快楽を欲し、貪っている。

(連れて行かれる……意識が……イッ……イッ……イッちやう……ッッッッ!!)

それは苦痛ではなく生涯初めての愉悅——。

陰核から高压電流が逆り、脊髄を駆け上がる。生まれて初めて味わう女としての絶頂の



奔流に、ファイナは絶叫していた。

「んああアアアアア——！！」

びゅるるゝっ！ どびゅっ、びゅ、びゅくんっ！！

魔男根から、真っ白な液体がシャワーのように噴き上がる。どくどくと力強く撃ち放たれる白濁汁はバケツ何杯分にも達し、ファイナの黒髪にまで降り注いで、黒レオタードを白く染め上げた。

「んぐっ、んくうっ！ ごっ、ごきゅんっ」

ずっぷり触手を呑み込んだ唇をさらに大きく開き、注がれる白濁をファイナは思わず飲み下していた。立ち上る強烈な臭気、ぬらぬらと伝い落ちる魔樹液が肌に染み透る。

薄い布地はぽつとりと濡れ、弛緩した四肢に力が入らない。身体の凹凸、乳首の陰影、股間の花びらの鬘^{ひだ}までもくつきりと浮き上がらせた様は、裸身より遙かに淫らだった。

ぐじゅ……ぐちゃ……っ。

再び蠢きだす触手に胃を抉られ、魔法少女はかすかに呻いた。

少女の脳裏に、ある男の面影が浮かんでいる。

魔法少女になるずっと前のこと、ファイナを育ててくれた父親の優しい笑顔だ。

(そう……私は、あのときも……自由を奪われて、なんの抵抗もできずに……)

途端に記憶が曖昧になる。

根本近くまでぐぷりと頬張らされた状態で、初乃は何度も何度も咳き込んだ。すると今度は、下にいる男子が愉悦にまみれた声を上げる。

「うわ、すごい！ 咳き込むたび、ま〇こがきゅうきゅう締めつけてくる!! もっと滅茶苦茶に、喉の奥突きまくってみてよ」

「おっけーっ！」

上下の口を同時に犯す少年たちは、悪辣な知恵を巡らせると、いつそう陵辱の手を激しくする。悲鳴を上げることも許されず、初乃は嵐に揉まれる小舟よろしく、苦悶の舞を踊る。

ぬぼぬぼっ！ ぬじゅちゅっ!!

「んふうおうっ、むふ、ずじゅるっ……!!」

ぐじゅっ、ずぶ、じゅぼぼっ！

花の蕾のような可憐な唇、つい先刻まで汚れを知らなかった乙女の花弁……二つの濡れそぼった少女穴は、醜いきり立った二本の若竿によって縦横無尽に廻られ続ける。

（ああっ……お股の……お腹の奥が、燃えるように熱い……それに、この強烈な匂いと味……頭が変になりそうッ!!）

精液と尿を噴き出す男性の排泄器……触手とはまた違う、内側に鉄芯が入っているような固さ。ぶにぶにとたわむ皮膚には血管が走り、そこから体液が分泌されるわけではないものの、初乃の唾液によってぬっちよりと湿り、唇を、歯茎をピストンのように擦り立て

る。

「あふう……おふ……じゆる、ちゅぱっ」

さらに先端から滲む体液だろうか、苦いような渋いような奇妙な味。唐突に、ファイナが乳房でペニスを挟み、突き出た先端をねぶっていたのを思い出す。あの娘もこれと同じものを味わっていたのかと考えると、なぜか胸の鼓動が速くなる。

（ファイナ……あの子、男の子の……精液を浴びて、ものすごく気持ちよさそうな顔していた。あんな臭いものを髪にも眼鏡にも、制服にもいっばい浴びせられて、感じてみたい……）

白濁シャワーを浴びながら愉悅に震え、快楽の頂いんたきに昇りつめた黒髪少女。そのときの至福の表情が脳裏をよぎり、かあつと頭の奥が熱くなる。

「ぶあつ……！ く、るし……もう、やめ……むぐふううッ!!」

金色の前髪は汗で額に貼りつき、首筋にも幾筋も汗が伝い落ち、魔力で作られた白いワンプイスは、ぼつとりと湿って重くなる。

真下からの突き上げにネクタイはいつの間にか緩み、襟元からは少女乳の柔らかな曲線がかすかに覗いている。力なく揺れる少女の細身は、実際以上に幼く、頼りなげに見えた。そんな少女の口と股ぐらに、勃起した男根がねじ込まれ、暴れているのだ。

「ああ、気持ちいい……口の中ぬるぬるして最高だよ。なんか舌とか必死に動かしてるし、本当に処女だったのかな？」

「だと思っけど、腰を動かすのもすぐくうまいよ。きつと、魔法少女ってのはドスケベにできてるんじゃない？」

げらげら、と品なく笑うその声が脳髓をチリチリと焦がす。もしかしたら、彼らの言うことは本当のことかもしれない……と、むせかえるカウパー氏腺液の匂いの中、初乃はぼんやりと思う。

(ダメ……お股がひりひりして、うまく考えられない)

真下からねじ込まれた男根、口に頬張らされたペニス、上下で暴れ回る少年の茎の動きに、頭にもやがかかってしまったようだ。

さっきまで耐えがたいと思われていた膣の痛みはすっかり引き、じんじんと断続的に疼きの波が繰り返し打ち寄せるだけ。

それに、口の中に広がるにがしよっぱい味にえずくこともなくなっている。この短い時間のうちに、自分でも驚くほど「犯される」ことに慣れてゆく自分を感じ、初乃はゾッとする。

(ちが……私は、こんなことちつともお……！)

ぐっ、ぐぷっ、ぐりんっ！

そのとき、下からの突き上げが少しずつ速度を上げる。見ると仰向けの少年が真っ赤な顔をして、びっしょり汗を掻いている。

「オレ、もう少して出そうだ……ッ」

「んひうううっ！ あぐ、ちゅぶっ……ッッ」

そう言って「ズシンッ」と重い一撃を膣奥に食らわせる。子宮どころか内臓ごと持ち上げられたような気がして、初乃は反射的に口中のペニスを強く吸い上げる。

「わわっ、お、オレも……舌が、絡みついて」

出そうなんだ、私のお股とお口に精液出しそうなんだ……初乃は口の中でビクビク震える竿に舌を絡ませ、下腹部にきゅっと力を込めて、膣肉を収縮させた。

どうやら彼らの限界も近いようだ。初乃は少年の腹に両手をつくると、腰を浮かせながらくねらせた。そう、ここで一気に腰を落として膣奥をうんと突き上げてもらえば、もっと気持ちいい……。

(あ、れ……？ 私、なんで……自分で身体を動かしてる……？)

ぎゅむっ、ぐぶっと膣でペニスを味わいながら、初乃は大変な事実気付く。さっきから手をついたり腰をくねらせたりしているのも、すべて自分の意志で行っているのだ。

ただ、邪神から解き放たれたというのに、どういうわけだか腰を振るのがやめられない。(止められない……なんで……っ!?)

『それはそう、これがお前の望みだから』

ざらりとした思念波が囁きかける。初乃の肉体を自在に操っていた邪神ゾリフェレウスだ。

(ちが……私はあなたに操られて、だ、だからこんな)

「肉体支配はとつくに解除している。さつきから腰を振り、舌を淫らに蠢かせているのは、まごうことなきお前自身の意志だ、初乃」

「うぶは……っ！ こ、こんなのって……あんっ、あくうっ！ ふああああんっ!!」

違う、そんなはずがあるわけない……だが真実は初乃自身が一番よく知っている。腰で円を描いてペニスの反り具合を楽しむのも、カリ首を舌尖でなぞって恥垢をねぶり取るのも、すべて初乃が、初乃自身の意志で行っている。

「あはうんっ……ち、ちがう……ちがううう……」

(違わない。何が守護者だ、自らの使命も忘れ、お前は浅ましく同胞の肉棒を堪能しているのだ。男のちんぼが欲しいと牝汁を垂れ流しているのだ)

止められない。邪神の言葉を否定できない。初乃はただただ妖しく腰をくねらせ、舌を肉茎に絡め、先からこぼれるしょっぱい汁を喉を鳴らして飲み下す。

男子生徒に群がられ、陵辱され、辱めを受けているというのに、全身の皮膚が異様なまでに敏感になって、快感に粟立っているのだ。

「んっ、んふあ、むくちゅっ……!!」

カリ首の溝の部分をなぞるように、ぐるり周囲をねぶり上げる。目を閉じると茎の直径から節くれ立った形状が手に取るようにわかる。亀頭に刻まれた細い溝が開き、「ぷちゅっ」と汁を噴きこぼす。

腰を悩ましくくねらせると、膣壁が圧迫されてペニスの弾力が味わえる。腰を浮かせな

から肉棒と蜜壺の擦れる感触を味わい、抜け落ちそうになると一気に腰を落として根本まで啜え込む。

にゆりゆ、じゅずぶつ……！

「うむふううつ……！ ちゅむ……つ」

下腹の奥、そこが一番熱く、全身を巡る快樂の火を生み出している。もういつでもやめられるはずなのに、やめられない。

身体が——いや、初乃の心がさらなる悅樂を欲し、わなないていた。

「ぶあつ……そんな……私、欲しがつてる……お、おちんぼ欲しくてたまらない………
ッッ」

自分自身の口から漏れた声に、初乃は驚愕した。

ペニスを吐き出す気もなかったし、言葉を発するつもりもなかった。なのに、自分は少年たちに語りかけたのだ。慌てて口をつぐもうとしたが、初乃の唇は持ち主の言うことを聞かず、さらに驚くべき言葉を続けたのだ。

「誰か……うしろに……うしろにも入れて……！ おっきいの誰か……ちんぼ、突っ込んで欲しいの……ッ」

ねっとり絡みつくような誘惑の声に、初乃は我が耳を疑う。邪神ゾリフェレウス——あの悪辣な魔神が初乃の口を操っていたのだ。

しかもあるうことか、もう一本をうしろの穴に……ッ!?

ゆらり……背後に近づく影に、少女は怯えた目を向ける。男子生徒がごくりと生唾を飲み込んで、ワンピースの裾を掴んでくる。

(ひっ……!! い、いまのは私じゃ……)

「い、い、いもうしろにも入れてくれって……確かに、言ったよな……!!」

ばざりと勢いよくまくり上げると、引き締まった青桃のようなヒップを風が撫でる。愛らしい割れ目の奥からは南国の香り、それはペニスを呑み込んだ膣が漏らす乙女の愛蜜。のしっ……と背後の少年が初乃と同じ向きに腰を下ろし、イチモツを近づけてくる。目を血走らせ、ふいごのような息を漏らす彼の指が、「むにり」と尻肉を押し分ける。

(い、いや……そんなところ、怖い……っ!)

だが少女の唇は、まったく別の言葉を吐いた。

「大丈夫、そのまま入れて……私もう最高に感じてるから、きつと入れられるだけで飛んじゃう……っ!」

ぐりっ……堅くすぼんだ菊穴に、堅い先端があてがわれる。拒もうにも言葉は縛られ、そして何より邪神の言葉が魔性の糸のように理性に絡みつく。

(最高に感じてるから……入れられるだけで……)

尻穴を犯されるなんて考えるだけでおぞましい、だが一方で、少女の心に魔的な好奇心が芽生える。もし本当に、より強烈的な快楽を味わえるのなら……。

「い、入れるぞ。本当に、け、ケツの穴に入れるぞ」

いけない、と「守護者の誇り」が強く警告する。快楽に溺れ、守るべき相手に犯されることを願うなんて、魔法少女としてあってはならないことだ。けれど一方で、瑞々しい少女の身体はアナル挿入という未知の世界にかつてないほど反応し、熱く疼く。

きゅんつと膣穴が収縮すると、びくんと動くペニスの固さが初乃を惑わせる。

（このままじゃ、お尻に入れられて……本当におかしくなっちゃう……おかしく……なつてみたい……？ ……ほんの……少しだけ……!!）

理性と情動がぶつかり、少女の肢体が苦悶する。だが、やがて震えは収まり、ぴちやつ……舌なめずりをした唇が言葉を紡いだ。

「………そんなに、入れたいの……？ ……じ、じゃあちよつとだけ、なら……いいわ………!!」

すすり泣くようなその声が邪神のものだったのか、あるいは自分が発したもののなのか、初乃にはわからなかった。

めちつ……!! ごりつ、みちみちみちつ……!!

「ふや……ああああ……つっ！ おっ、お尻い、おっ、お尻に……つ、は、入って……ッツ!!」

乙女の括約筋はあっけないほど容易に異物の侵入を許し、最初の突き入れで、初乃の肛門はペニスを半分ほども呑み込んでしまう。だが挿入深度はそこまでで、強烈な締めつけに今度は少年が呻く。

「くうっ！　ちっ、ちんぼちぎれそうだッ」

「ま、前と、両方入ってるう……っ！　な、中で擦れてるッ!?　くひうう……動いて……も、もつと奥まで抉つてええええッッッ！」

魔法少女の号令とともに、少年たちは少女の二つの肉穴を責め始める。裏門への挿入でさらに狭くなった腔穴がゴツゴツと突き上げられ、二本の肉棒が交互に腸膜を擦り立てる。肛門を貫いた少年は背後から初乃を抱きすくめるように、胸をさすりながら腰を振る。

薄い膜一枚で隔てられた淫ら穴が前後交互にくじられると、「ぐぼっ、ぐぶっ」と湿った音がワンピースの内側から響く。特に直腸への突き入れは想像以上に内臓が圧迫され、初乃は少年の腕の中で活け魚のように跳ね、突き出した舌で男根を迎え入れる。

「お股熱いっ、お尻も熱いッ！　お口にも、お口にもちようだい、ちようだいッ!!　ん、むちゅっ」

ぐぷりと唇を割ったペニスは唾液を撒き散らす勢いで突き入れられ、初乃は自分から男子の腰にしがみついて、喉奥まで頬張ってみせる。じゅぶじゅぶと口腔を蹂躪する男根は菌茎を擦り、舌に搦め捕られ、先走り唾液でとろけた湯壺でのたうち暴れる。

「ん、おいひい、おいひいのう……んふう」

と、いつの間にか魔法少女の周りに他の男子たちが集まってきている。手に手にペニスをしごく少年たちは前屈みになり、射的よろしく尿道を初乃に向けて、真っ赤な顔でイチモツをしごく。

(すご……お、おちんぼが……いっばい……)

ずりゅっ、ぶりゅっ、じゅぼぼっ！

抽送が激しさを増し、尻肉がぶりぶり引き出され、また押し込まれる。膣壁が収縮して愛液の飛沫が飛び散って、クリトリスが火花を上げた。

「あむううっ、んく、んはあああ……ッ。らめえ……壊れるう……わたし壊れひやううっ！」

込み上げる予感、押し寄せる快感、渦巻く牡臭に吹き飛ばされそうな浮遊感。幾人もの少年たちの欲望の中心、快楽の渦のど真ん中で、初乃はよがり続ける。

「はひ、んじゆるるっ！ はふ、おちんぼから、お汁出そうなの……？ 出しているわ、いいから……ぐちゅぐちゅしてええええッ……!!」

涙目でペニスの先端を見つめ、半開きの口から舌を突き出す。根本に指を絡めながら下腹に力を込めると、膣肉と括約筋で二本の竿を強く絞り上げた。

どぶっ、どくどくッ！ びゅ、びゆるるっ！

子宮と喉奥を揺るがす勢いで放たれる熱い樹液を、初乃は上下前後三つの穴で受け止める。間髪入れず噴き上がる精液シャワーが周囲から降り注ぎ、金髪純白の少女は生臭い白ペンキに内も外も汚された。

カウパーとは比べものにならない強烈な臭気は初乃をただ一匹の牝に変える。口中に注がれた粘液に喉を鳴らし、初乃は絶頂に駆け上がった。

「んぐ、むぐっ……んあ、精液出てる……っ！ らめえ、気持ちいい、気持ちよすぎてもう……私……イクウうんんッッ……!!」

飲み下した糊状の液が、べつとりと喉に貼りつく。濃厚な高タンパクの体液、その味と臭気に、手も足も勝手に痙攣を繰り返す。唇の端から白い液を飛ばしながら、悦楽の叫びを上げずにいられない。

「んはああ……せいし、おいしい……っ。もつと飲ませて……初乃にいっぱいかけてえ……っ。身中で、どろどろに、して……くらさいい……っ！」

うっとりとおねだりする魔法少女になおも降り注ぐ樹液。十数人分もの精液で、美しい金髪のツーテールも、純白のワンピースも汚されてゆく。

あちこち汁溜まりができ、輝く金の鎖も牡汁に曇る。初乃はスカートの裾をそつと摘み上げ、恍惚の笑みを浮かべてみせる。たつぷり注ぎ込まれた白濁は、股間から噴きこぼれ、少女の太股を濡らしていた。

「うふふ……あは……精液……の臭い……」

焦点の合わない眼差し、うっすら歪めた笑みは清楚で理知的な魔法少女の面影など残っていない。その耳に、邪神ゾリフェレウスの思念が伝わってくる。

『よくやったね初乃、さあ最後の仕上げだ……お前の大切な友達に祝福の口づけを』

ゆらっ……いまにも崩れ落ちそうに膝を震わせつつ、金髪の魔法少女が立ち上がる。ぽとっ……ぽとっ……と精液の滴を滴らせながら黒髪眼鏡の少女の前に立つと、ゆっくりと覆い



かぶさって、体液の味のする唇を重ねあわせる。
ファイナの胸にぼう……と魔法陣が灯った。

すでに、口にするのものはしたくないおねだりの言葉は、快美を誘発するキーワードではない。淫らな言葉を口にして、自分が肉欲の走狗に過ぎないのだと自覚すればするほど、羞恥で頭が沸騰しそうになってしまう。

湖のように深く青い瞳には、宙吊りで責められる金髪少女の痴態が映っていたが、いまのファイナは瞳の中の少女に同調することを何より望んでいた。その欲望に答えるように、少女たちのアヌスに突き刺さった触手が大きくうねる。

「ファイナアツ、ファイナツ、いいっ、気持ちいいの、いっしょに……いっしょにいいいっしょッッ」

ぶおおおんっ！ ぐじゅっ、ズクンッッ！！

「きひゃわうらんんっっ……！」

乙女の声が重なった。

驚いた子犬のような、くすぐられた子猫のような、鼻にかかった甘ったるい喜びは排泄口を辱められて悦び悶える背徳の声に他ならない。それは前の穴を穿つ肉男根のリズムに合わせ、斜め後方から少女の子宮めがけ、ズンズンと直線的な動きで激しい突進が繰り返される。

「ぐひっ！ ひゃうっ！ 潰れちゃ……ううッッ。お腹の中、ぐちゃぐちゃに……なっちゃううウウ」

限界まで反らした白い喉に汗が伝う。バチバチと目の裏で瞬くフラッシュバックの中、

ファイナの意識は原初の本能に回帰する。

発情期を迎えた牝が持つ貪欲な肉欲が、与えられる快感を浅ましいまでに貪り食らう。もはや掘削工事と変わらぬ勢いで穿たれる触手による肉穴穿孔に悦びの汁を漏らし、より深く啜え込もうと自ら悩ましげに腰をくねらせ挑発せずにはいられない。

「んむひゅっ、かひゃっ、イグッ、いっっちゃう、イキっぱなしになっちゃう……ん、ちゅむっ」

物欲しげに頬に粘液をすりつけてきたやや細めの触手に気付くと、ファイナはれろりと舌なめずりをして肉蛇にちゅっど口づける。

「あふっ……んちゅ、むふう……んっ。あ、ん……いいよ……奥まで……んんん」

愛しい恋人との熱いペーゼのように魔触手と舌を絡めあい、体液を甘露のように飲み下す。そして少女は罪過にまみれ墮落してゆく快感に浸りつつ、忌まわしき触手を啜え込んでいく。

ずず……ずぶぶぶ……ぶびゅっ、ずるるっ。

白い喉が上下し、肉縄は食道粘膜を擦りながらゆっくりとファイナの胃の腑に陣取ると、下半身を犯す魔男根同様に、リズムカルに蠕動運動を繰り返し始める。

ずりゅっ、ずにゅっ、ずぶぶっ、ずぐちゅっ！

徐々に抽送の速度は上がり、ファイナは自分が、初乃とともにこの怪物どもに貪られていくのだという自覚を、信じがたいほどの多幸感とともに受け止めていた。魔法少女の使

命も誇りももう関係ない。醜い怪物どもの贄となって辱められ、快樂の淵に沈んでいく。それが自分に似つかわしいさだめなのだ。

（気持ちいい……気持ちよすぎて、何も考えられない……ううん、もう考えなくていいんだ……もう何も……）

ずっ、ずりゅっ、ずぼ、ずぼぼぼっ！

ますます激しさを増す触手の動きは、魔物が乙女の肉に満足していること、そして彼女の欲望の迸りが近いことを示していた。

「んじゅるっ……はああんっ、くるううっ、来てっ、いっぱい来て、全部ぜんぶッ、ぶちまけてえええええええええええッッッッ！！」

触手を吐き出したファイナが、牝色に濡れたよがり声で叫ぶ。初乃も負けじとねつとり絡みつくような声で悶え喘ぐ。

「んおおっ、げぶっ、ま〇こお、しびれりゅううう!! おひりいいい、熱いのお……げぶっ、んむじゅっ」

肉穴を抉られながらも、目の前で蠢く触手にむしゃぶりつく貪欲な顔に、ファイナはぞわぞわするような高揚感が込み上げるのを感じた。再び触手を頬張りながら、少女は絶頂の期待に身を震わせる。

（来る……きちやう、すっごいのがきて、私たち呑み込まれる……ッッ！）
どくんっ、どくどくうっ！

最初の脈動、そしてアヌスがぎちぎちと押し広げられる。間髪入れず、口中にもどろつと粘っこい液体が充満し、食道を、器官を塞いで鼻孔から逆流して白い鼻汁が勢いよく噴き上がる。

どっ、どどどどどど!! どびやああんッッッ!

触手から迸る射精の振動に、クリトリスが揺すぶられる。膣が限界まで押し広げられ、鈍痛を訴える子宮口に砲弾、いや土石流かという凄まじい量の白く濁った粘液流が激突した。溶岩のように熱く煮えたぎった、魔物の子種汁が乙女たちの神秘の泉をこれでもかと汚し、陵辱する。

「んあふっ、あぷ、んひいいあああっつ! 溶けちゃうふう、みんなとろけちゃうよ
おとお!」

三つの穴に、三つの衝撃、そして初乃の喉を犯す触手ペニスが締めつけられる快感。肉穴から溢れ出る白濁汁は少女たちのコスチュームを、素肌を、金と黒の髪を臭い獣の匂いで染め上げる。それでも、放出は収まらない。

シャワーのように降り注ぐ白濁粘液が視界を閉ざす。それでも肌に当たる感触と恐ろしく生臭い臭気で、射精がなお続いているのがわかる。ごきゅ、ごきゅと喉を鳴らして口中のものを飲み下すと、逆流する自らの吐息がザーメンの香りを放つ。

どびゆるるるっ、びしゃっ、どぷっ、どくどくっ……!

「ひいいあああ〜! あはあっ、あむっ、んぐう、くっ……くひっ……」

痛みを超越した奔流がファイナを汚し、初乃を汚し、汚辱という名の快樂が心と身体に染み通る。汚らしい触手の体液に汚され、魔物に犯され絶頂に達した罪が、二人の少女を堅く結びつける。

「初乃おおお、はつの、はつのおおおおお」

「ふぁいな……ふぁいなっ、ファ……ッ」

いつしかファイナは粘液に潰された目をかすかに開き、眼前の少女と視線を絡ませていた。潤んだ碧と蒼の瞳が交差する。身体中の穴という穴を犯され、汚されることそれ自体に悦びを覚え、喜悅の表情を浮かべる少女。身も心も墮落させられ、化け物の贅となることを自ら選んだ罪と欲にまみれた偽りの乙女。

初乃の目はファイナを哀れみ、共感し、蔑んでいた。そして自分も同じ目で彼女を見ているだろうということを、ファイナは深く理解していた。

（私は……わたしたちは……）

ずびゆるるるるるっ！　ぶびゅっ、どびゆるっ！！

だめ押し的大量噴出に、少女たちの理性がいに崩壊する。

「いく、イクウ……あひいううっ！　んはあおおうんっつ、いいっ、いつちゃ、イッチャうんるるるッッ！！」

全身の骨が砕け散りそうな痙攣の中、魔法少女たちの意識は狂おしい狂気と快美に沈んでいった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>